

第179回くらしの植物苑観察会 2014年2月22日(土)

「くらしを守るもりやはやし」

青山 宏夫(国立歴史民俗博物館 歴史研究系教授)

— 屋敷林のはなし —

文部省唱歌『汽車』の2番では、車窓からの眺めを、「遠くに見える村の屋根、近くに見える町の軒、森や林や田や畠、後へ後へと飛んで行く」とうたう。もりやはやしは、田や畠とならんで、誰もが思い浮かべる農村の風景であった。これらのもりやはやしは、宅地や耕地にこそ開かれてはいないが、農村生活にとって欠かすことのできない働きをもっていた。たとえば、そこから建築用材や生活資材、さらには食料を手に入れることはもちろんだが、災害を防いで人びとのくらしを守ることもあった。

関東ロームに覆われた武蔵野台地では、乾燥した冬の季節風によって、畑の表土が飛散してしまことがあった。これを防ぐために、畑のアゼに茶樹が植えられた。こうして作られたのが狭山茶である(図1)。また、吹雪のなかを走る鉄道や道路には防雪林が、暴れ川には水除林がしばしば設けられた。さらに、屋敷の周囲にも樹木が植えられて、人びとの日々のくらしを守っていた。今回の「くらしの植物苑観察会」では、この屋敷林を取りあげる。



図1 畦畔茶園 1968年2月4日 (石井實フォトライブラリー 本館蔵)

屋敷林はさまざまな働きをもっているが、なかでも自然災害に備える役割は大きい。そのため、それぞれの風土に適した特有の屋敷林が各地に成立した。とくに、日本の3大散村地帯とされる、胆沢扇状地(岩手県)・砺波平野(富山県)・簸川平野(島根県)では、それぞれ「エグネ」「カイニョ」「築地松」と呼ばれる特有の屋敷林が作られた。当日は、このうち砺波平野の散村(図2)を中心に、散村の歴史、屋敷林のかたちと働き、近代以降における屋敷林の変化などについて解説する。



図2 砺波平野の散村風景 1979年10月10日 (石井實フォトライブラリー 本館蔵)

次回予告 第180回くらしの植物苑観察会 2013年3月22日(土)

「朝鮮半島の華花」 高田 貫太(国立歴史民俗博物館研究部 考古研究系准教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要